

関連学会印象記

Infusion technology 研究会の将来性は大

～悪性高熱研究会と局所麻酔学会と併せての学会印象記～

熊澤光生

昨年末平成 6 年 11 月 25 日、26 日の 2 日間、東京大手町 JA ホールを同一会場として麻酔科関連の 3 つの研究会と学会が開かれた。

第 1 回日本静脈麻酔 Infusion・Technology 研究会 (11 月 25 日 (金) 13:00~17:00) は、静脈麻酔法を主として麻酔中の薬物投与の Infusion Technology に関する研究を行うことを目的として発足した。浜松医科大学手術部 森田耕司氏による「Infusion Technology の発展と今後の可能性」、東京大学麻酔学矢島直氏による「静脈麻酔薬の薬物動態学と薬力学」、Professor Colins S Goodchild による「静脈麻酔法の臨床的価値—吸入麻酔法との比較—」の 3 つが行われたが、特に最初の森田氏の講演により、この研究会のこれからの方向性を知ることができた。

近年持続注入器 (シリンジポンプ) の発達と普及により、bolus injection とせいぜい点滴速度の調節に頼らざるを得なかった時代に比較して、はるかに精確な微調整のできる投与方法が可能になった。又併せて血中薬物濃度の測定も可能になり、有効血中濃度を持続する投与方法の工夫も容易に行えるようになって来ている。しかし薬物投与の標的とされる target organ あるいは target site、静脈麻酔薬においては脳内であり、筋弛緩薬においては神経筋接合部であり、硬膜外オピオイド投与においては、脊髄後角オピオイドレセプタであるが、その部位での濃度を直接測定することはできない。その薬物の target organ への薬理効果により間接的に推測できる。筋弛緩薬では、TOF ratio など nerve stimulator でかなりの精度でそれは可能であるが、静脈麻酔薬においては、脳内濃

度や麻酔深度の測定法はまだ未発達といえる。

また、生体内投与した薬物の pharmacokinetics を組織への血流量、血漿/組織分配係数などを考慮し、生体内の各部位での濃度時間推移を、数値モデルとしてシミュレーションするコンパートメントモデルも、この研究会の大きな課題対象となろう。

このように麻酔科関連の infusion technology に関する研究は、吸入麻酔薬の省資源・環境汚染という問題点を考慮するとこれからますます興味を引く分野になるだろうとの印象を得た。

第 7 回日本局所麻酔学会 (11 月 26 日 (土) 9:30~16:30) は、ミニシンポ「脊髄と硬麻—特に帝王切開術に対して」と一般演題 30 題が行われた。手術開始時から術中にかけて局所麻酔による無痛を得ることが、術後痛の発生に影響を与えるのか否か、すなわち pre-emptive analgesia に関する研究が今後この学会の一つの大きな興味対象となるのではなかろうか。

第 18 回悪性高熱研究会 (11 月 26 日 (土) 9:00~12:15) は第 3 回悪性高熱症シンポジウム国際会議および第 7 回悪性高熱症ワークショップ国際会議が昨年 7 月に広島で行われたばかりの影響もあってか、一般演題が 13 題と少なかった。本会は 18 年にわたって日本の悪性高熱症の臨床と基礎の両面からの研究の牽引的役割を果たし、その診断・治療・発症起点の解明の進歩に大いに貢献した。ますますこれからの研究を深める必要性と、研究会の研究対象を術中体温管理に広めて、より発展して行く方向性が世話人会で確認された。